

O.B.O.G 訪問

リハビリテーション科学部
理学療法学科・作業療法学科 編

今年3月、理学療法学科、作業療法学科から本学初めての卒業生が巣立ちました。
理学療法士 (PT)、作業療法士 (OT) とともに国家試験合格率100%を達成。全員が専門職として就職しています。
1期生の誇りを胸に医療現場で活躍を始めた卒業生を訪ねました。



亀田リハビリテーション病院(千葉県) 理学療法士
松尾 惇志さん
(リハビリテーション科学部理学療法学科2017年卒業)

患者さんは理学療法士の鏡

松尾さんはこの春、グローバルスタンダードな医療の提供、患者満足度の高さと全国に知られる亀田メディカルセンターに就職しました。「グループ内病院のローテーションで様々な領域の経験を積めることが魅力」と熱意を見せる松尾さんのキャリアは、回復

期リハビリテーション病棟のみの専門病院でスタートしました。同院は生活場面にリハビリを組み込み365日体制で実施、18名いるPTも休日、早番・遅番はシフト制という勤務スタイルです。現在松尾さんは1日20単位前後(1単位=20分)のリハビリを担当しています。「私の歩行補助が患者様の歩行に鏡のように反映されるのを目の当たりにした時など、患者様に学ばせて頂いていることと共に、この仕事の責任の重さを実感します」。

痛みがわかる理学療法士

1年目の心構えを聞いてみました。「目の前にいる患者様に最善をつくり、結果につなげることです。新人の私でも経験10年の先輩でも患者様にとっては同じPTですから」。患者さんの思いをまっすぐ受け止めよう



患者さんの笑顔がたえない同院を見学して、「このスタッフと一緒に仕事がしたい」と思ったのが就職の決め手だったそう。

という強い覚悟のベースには、サッカーに打ち込む高校時代、ACL(膝前十字靭帯)を損傷し膝にメスを入れなければならなかったつらい経験がありました。「サッカーをやる者にとってそれがどれほど大きなダメージかを誰より理解し、絶望しそうな私を励ましてくれたのがPTでした」。また、臨床に加え研究活動にも意欲的で、「いつかACL損傷リスクが高い人をスクリーニングする方法を確立したい」と高い志をもって日々患者さんに向き合っています。



市立札幌病院(札幌市) 作業療法士
清水 彩さん
(リハビリテーション科学部作業療法学科2017年卒業)

魅力溢れる作業療法士の仕事

「総合病院であり、リハビリテーションが必要となった患者さんに最も早い段階で介入できる急性期病院であることに魅力を感じた」という清水さんが就職したのは市立札幌病院リハビリテーション科です。毎日新しい患者さんがたくさんやってくるため、短い時間で

必要な情報を得て判断しなければならない急性期リハビリテーションの現場について行くのは「まだ大変」といいますが、基本をおさなりにせず丁寧な仕事をしようと前向きに取り組んでいます。

「患者さんがどんな人かを知り、その生活の近くで機能回復だけでなく心のケアも含めて介入できるのがOTの仕事の魅力、強みであるとあらためて感じています」と笑顔でやりがいを語る清水さん。どの年代の患者さんからも信頼され必要とされるOTをめざして、リハビリを「つらいものではなく楽しいものにできる工夫」をいつも考えているそうです。

キャリアプランはじっくりと

清水さんにとっては活躍のステージが目の前に広く開けていることもOTの魅力のようです。「まだ駆け出しですから、いまは臨床に集中し先

輩からできる限り多くを吸収することに必死ですが、いずれ社会人大学院生になることも考えています。臨床で興味をそそられる分野に出会えば専門性を高めながら臨床を極めるのもいいですし、将来は教員として作業療法の発展に貢献するという道もあるかもしれません。専門職になったその先に広がる選択肢が、仕事をする上でのモチベーションアップにつながっているようです。やりたいこと、なりたい自分をじっくり考える清水さんの5年後、10年後が楽しみです。



明るく前向きな職場。「質問しやすく、教え上手、一緒に考えてくれる先輩OTに育ててもらっています」と清水さん。